

スタグフレーション

—景気後退とインフレーションの同時進行—

はじめに

最近では原油価格の高騰が続き、原油価格の指標銘柄WTI(West Texas Intermediate)は1バレル130ドルを突破するなど、5年前の5倍近くの水準に達しています。過去、このように原油価格が高騰した時期は1973～1974年の第1次オイルショック、1979年の第2次オイルショックに遡ります。第1次オイルショック時に日本経済は戦後初のマイナス成長と20%近くの消費者物価の上昇を経験し、第2次オイルショック時には日本では一次的な消費者物価の上昇に終わりましたが、欧米経済は景気後退とインフレが同時進行する二重苦に見舞われました。今回も日本経済が第2次オイルショック時の欧米のような苦境に陥ることが懸念されています。

1. スタグフレーションとは

スタグフレーション(stagflation)とは、停滞(stagnation)とインフレ(inflation)との合成語で、前述のオイルショック時に発生したように物価が持続的に上昇する中で景気が後退する経済現象のことです。スタグフレーションの特徴は、通常、景気が後退すると需要が減少するため物価も下落するという関係が、景気が後退するにもかかわらず物価上昇が進行するという、関係が逆転していることにあります。

2. スタグフレーション発生の要因

スタグフレーションが発生する要因は理論的には大きく2つあると考えられています。

1つは、今回のように原油価格の高騰によって生産の持続が困難になり、モノが足りなくなる場合です。生産活動の低下で経済成長が低下する一方で、供給能力の低下によるモノ不足からインフレーションが加速される場合です。

2つ目は、何らかの要因で人々の心にインフレ懸念が植え付けられ、景気の状態と関係なく、自己実現的にインフレーションが進行する場合です。例えば、1970年代のスタグフレーション時には、原油価格高騰が家計にインフレ懸念を生じさせ、労働組合などの賃上げ要求により名目賃金を押し上げた結果、企業は製品価格を幅広く値上げしました。それがさらなるインフレ懸念と賃金の上昇をもたらし、景気後退下にもかかわらずインフレーションが持続することになりました。

3. 再びスタグフレーションに陥る可能性

現状をみると、スタグフレーションが発生する要因となる原油価格の高騰が生産に影響を与え供給能力を低下させてはいるものの、モノ不足によってインフレーションが加速するまでには至っていないとみられています。

インフレ懸念についても賃金上昇圧力が弱い今のところ落ち着いているとみられています。かつての1970年代のように労働組合などの賃上げ要求は強まっていないことや、景気の停滞による雇用環境が良くないことから、家計にとっては、賃金の上昇を期待できない状況にあるからです。

また、現在、高騰を続けている原油価格ですが、これには新興国の資源需要増大のほか

に、米国のサブプライムローン問題の影響で金融市場から原油市場へ投機資金が流入していることが要因となっていると言われてい
ます。原油価格は実需とはかなり乖離した域にまで高騰しているとの見方もあり、いずれは反落する可能性も指摘されています。

こうしたことから、本格的なスタグフレー

ションに陥ることは当面はないのかもしれませんが。しかしながら、原油のほか、石炭や鉄鉱石などの資源価格、とうもろこし・小麦等の食料価格も高騰しており、今後はこれらの物価が物価全般に波及し、景気の後退を引き起こす危険性があることに留意する必要があります。

